殺風景

青いものと白い雲とで息がつまる
黒い個体がすぎ去るので傷つく
やがて傷はねばる
重い　重い
しづかにしてゐることは不可能
自分　自分　自分と自分との背中
重いのは重いのではなくて　目で見てゐて
ぼんやりと遠くのものが入つて来るのだ
水のやうにたまる　血の色
小さくはねかへるやうに白い煙が立ちのぼる
聞えて来る爆発音
誰なのだ　重い重みは
四本の足を持つた赤ん坊には
生命があつた
とらへどころのない流れ
たしかに流れてゐる
山は　はるか　下界に

しづかに風が岩をめくりあげる
月の光が迷ひながら辿りつく
裂け目の音も舞ひあがる
去り行く　重み
自分　自分　自分と自分との重み
きりきりと光つて　二つのもの
横になつてゐるのは　落下したのか
吐息　父親の大きい顔面
四本足の赤ん坊はわめきはじめる
二つのものではなく
二つになりきれないままに
松の枝を越す
走る　急に高く　白く
はるかに　雫はしたたる
回転すれば
ふたたび　帰つて行く
海は波立つ
握りこぶしの中につかんだ朱色
ひだの影のあひだにへばりついたのは

あたたかい　赤
空気の中を
流れてゐるものは　鉄
しづかに風が岩をめくりあげてゐる
岩の上に　月の光がそそぐ
二つの赤く血だらけの顔面
風が裂けて　ますます強く
だが
振りかへれば
輝く　黄金の太陽

俺の二つの頭が破裂して
俺は無数の手を見た
指が　指さしながら流れて行く
雲が　とりまき
半面の青
ふたたび俺は落ちた　俺は立つてゐたのに
樹が小さく見える
馬が走つてゐる
俺が俺の背中に　刃のめりこむ力を感じ
自分と自分の背中　自分の背中に自分の背中
四本足の赤ん坊は　俺は俺で　自分で
ふさがつた暗黒のやうに
血の色が光の中をまばゆくしたたり落ちる
自分にはない安らぎをあたへながら
重なりあふ赤い砂丘の風景の中を　風もなく
血もなく　たくさんの輝く積乱雲
赤く重なりあふ砂丘の風景の中を
ゆたかに流れてゐるもの　静かに
噛み　白く　軽快に　青く　自分の重みの向ふに
落ちてゐる　はるかに
めらめらとめぐり　迷ひ